

## 第 2 章

# 自分自身を とりまく人間関係

黒沢 幸子 (1 節)

槇野 葉月 (2 節)



## 第1節

## 周囲とのかかわり

## 1. 親子関係

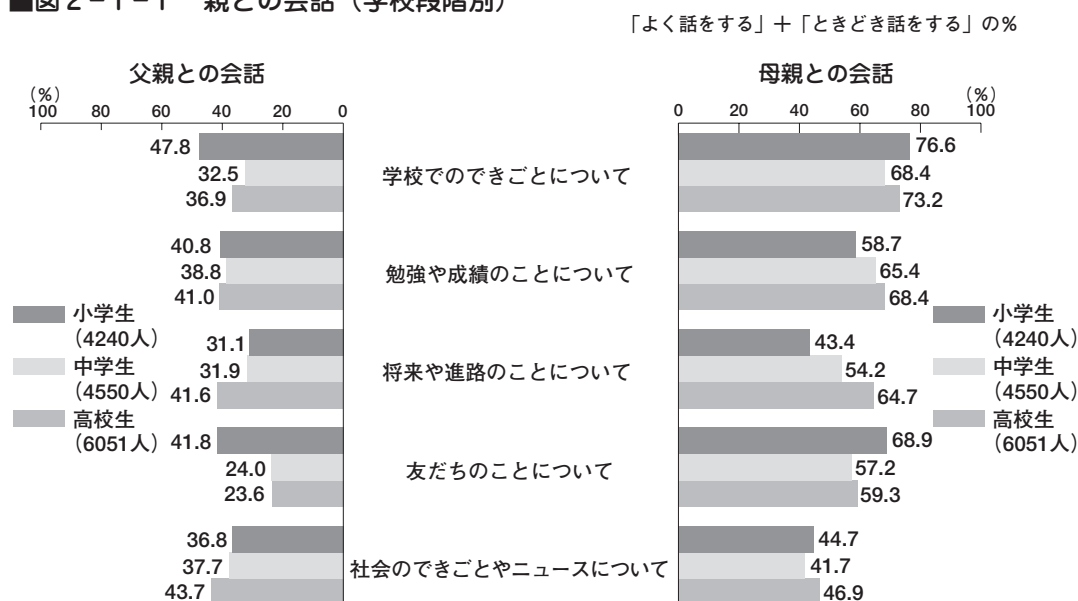
親子の会話は母親が中心で、父親との会話はその半分程度であるが、中・高生になると父親が煙たくなり、とくに友だちのことは話さなくなる。親と話さないのは中2生がピークであるが、成長とともに会話はまた増える。

## ◆ 母親との会話が中心の親子関係

図2-1-1には、子どもたちが父親や母親と各項目に関して、「よく話をする」+「ときどき話をする」と答えた割合について、学校段階別に示されている。「学校のできごとについて」話す割合は、小学生では母親とは76.6%、父親とは47.8%であるが、中学生では母親68.4%、父親32.5%、高校生では母親73.2%、父親36.9%となっている。また「友だちのことについて」話す割合は、小学

生では母親68.9%、父親41.8%、中学生では母親57.2%、父親24.0%、高校生では母親59.3%、父親23.6%となっており、中・高生は父親との会話が母親との半分以下となっている。その他の「勉強や成績のことについて」「将来や進路のことについて」「社会のできごとやニュースについて」といったすべての項目において、父親よりも母親との会話の頻度が高く、母親との会話が中心の親子関係がうかがえる。

■図2-1-1 親との会話（学校段階別）

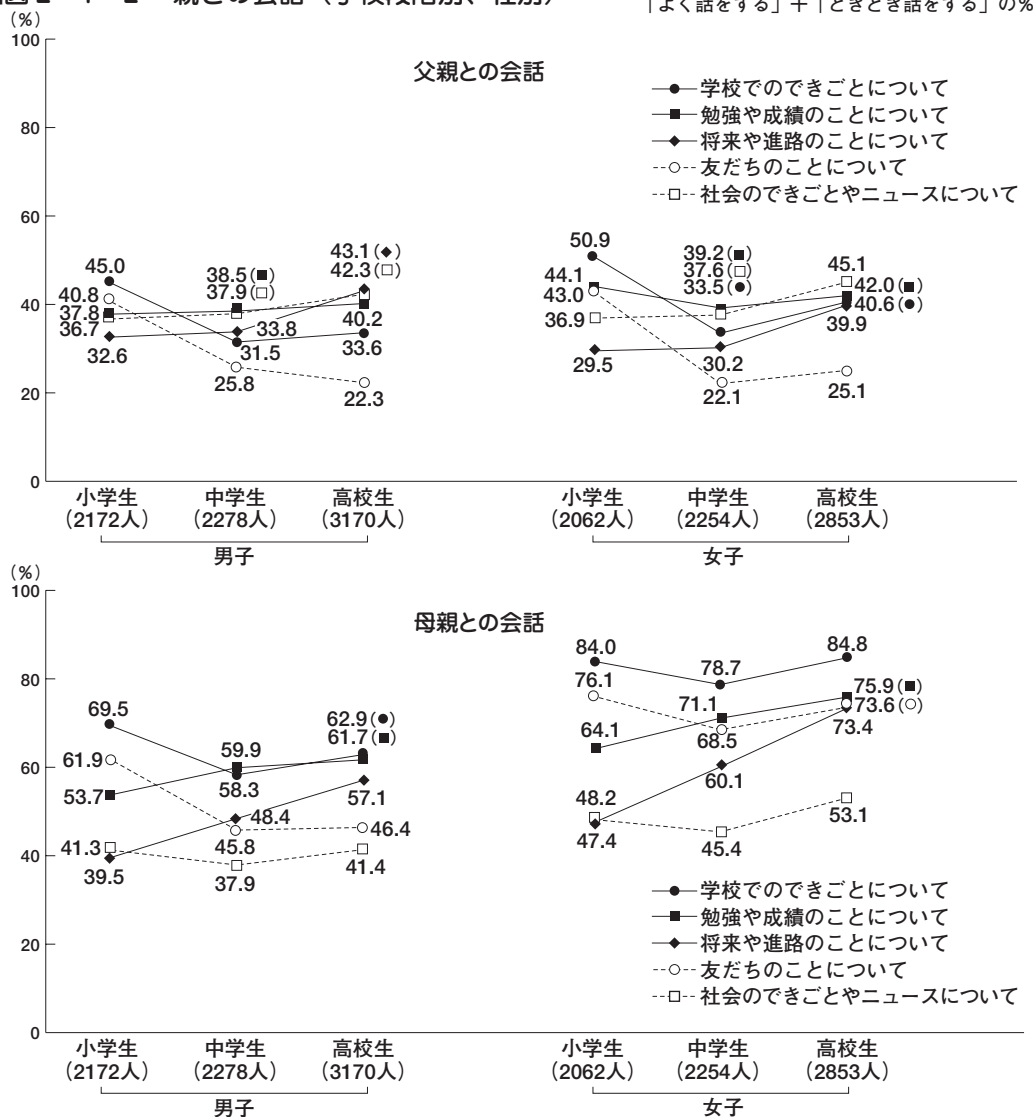


## ◆男子は親に友だちのことを話さない

図2-1-2には、父親や母親と「よく話をする」＋「ときどき話をする」割合を、各項目に関して、性別、学校段階別に示している。まず、顕著なのが、男女とも「友だちのことについて」「学校のできごとについて」は中・高生になると、とくに父親と話さなくなることである。また、男子はこれらの内容について母親とも話さなくなるが、女子が母親と会話する割合はさほど変化しない。男子は

学校や友だちのことについて父親だけでなく母親とも話さなくなることがうかがえる。さらに、中学生から高校生になると、男子は「将来や進路のことについて」「社会のできごとやニュースについて」は、親と会話する割合が増えるが、女子では、これらに限らずすべての項目について親との会話が増える傾向にある。学校や友だちのことについて、男子は学校段階が上がると親と話さなくなり、女子は中学生のときにいちばん話さなくなる。

■図2-1-2 親との会話（学校段階別、性別）

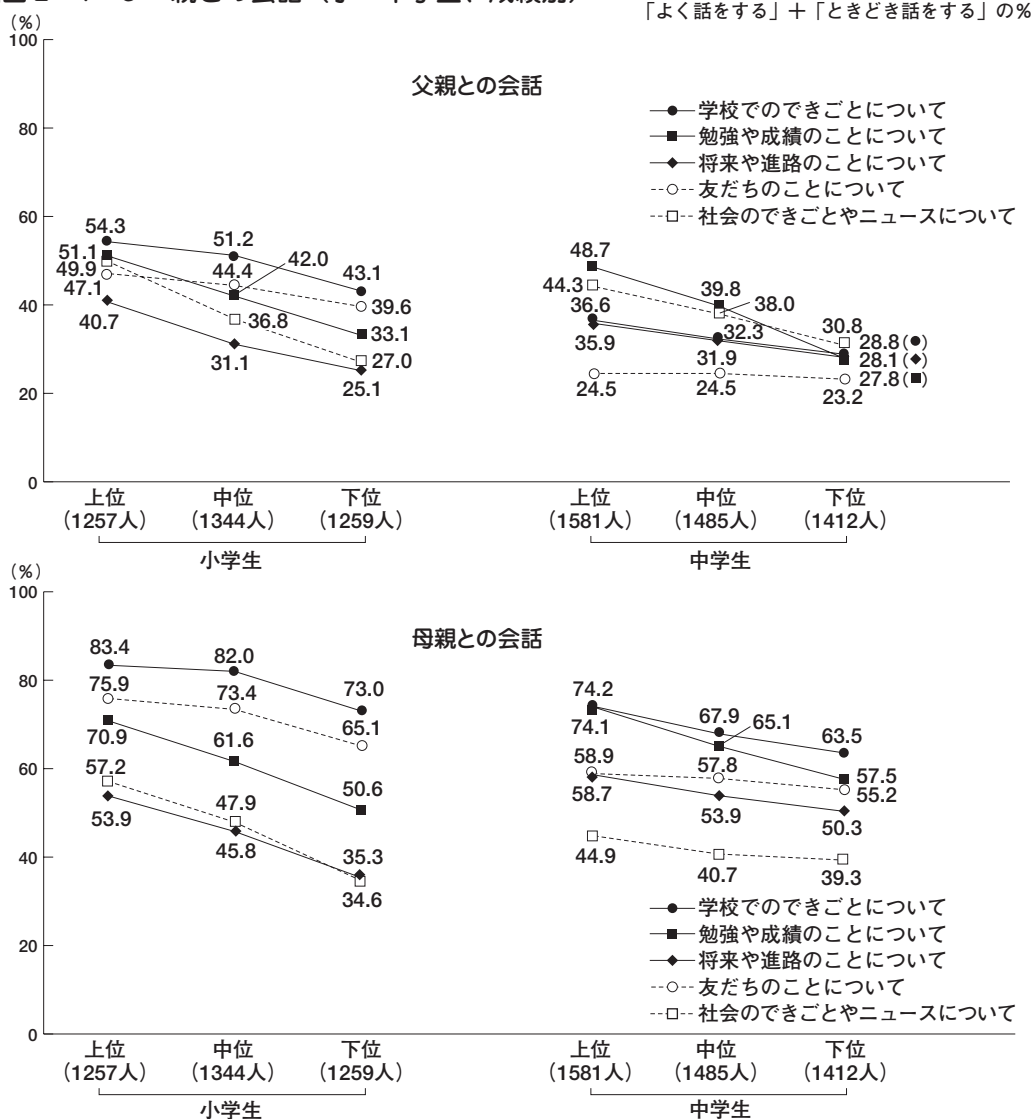


## ◆成績上位層は、親とよく会話している

図2-1-3では、小・中学生について、成績別に、各項目の父親や母親と「よく話をする」＋「ときどき話をする」割合が示されている。小学生の成績上位層は、どの項目についても親とよく会話している。それに対し、中学生の成績上位層は、「社会のできごとやニュースについて」や「勉強や成績のことについて」は父親とはよく会話しているが、

「友だちのことについて」は成績による差はあまりみられない。また、母親とは「学校のできごとについて」や「勉強や成績のことについて」はよく会話しているが、「友だちのことについて」の会話は、父親と同様に成績による差は少ない。中学生も、成績上位層は全般的に親とよく会話しているが、「友だちのことについて」話す頻度は、成績とは関連性が少ないようである。

■図2-1-3 親との会話（小・中学生、成績別）



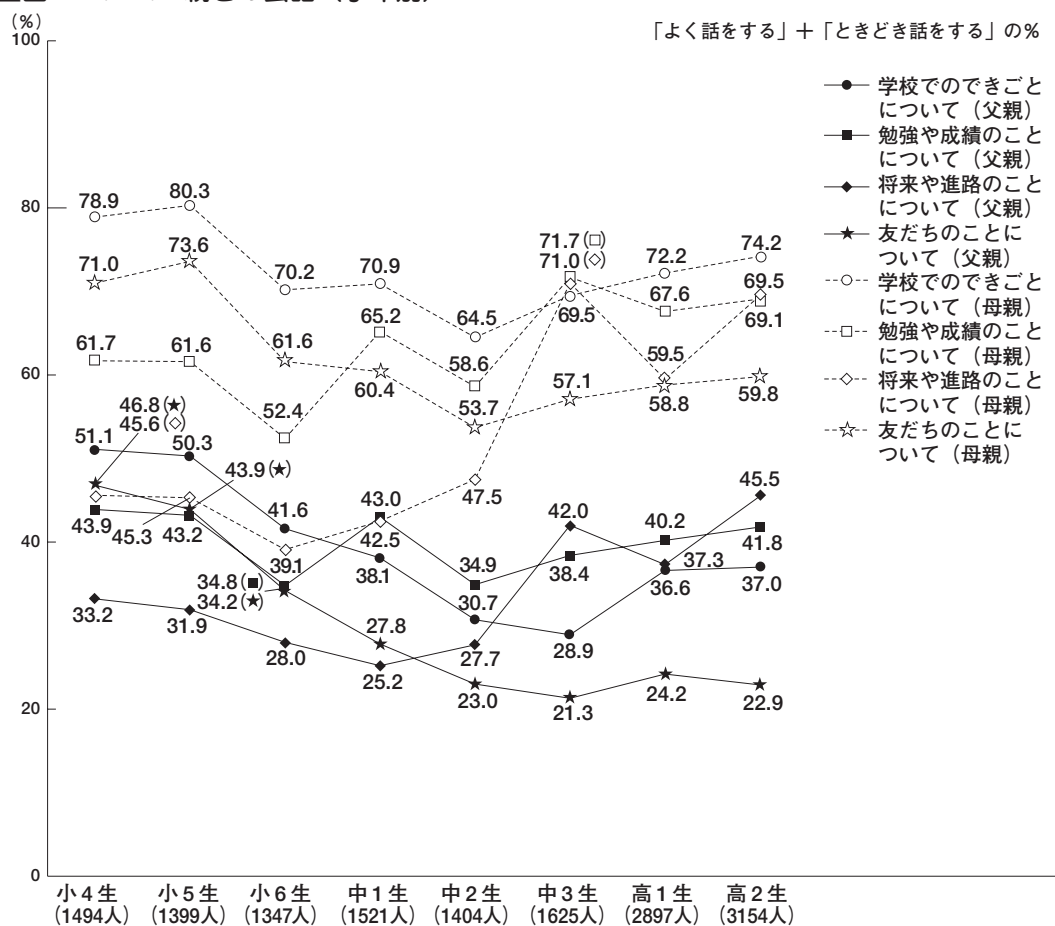
## ◆小6生、中2生は、親と口をきかなくなる！

図2-1-4には、小4生から高2生までの学年別にみた父親、母親と「よく話をする」＋「ときどき話をする」割合について、学年差のみられる4つの項目に関して示されている。小4生、小5生は、すべての項目について親と多く会話している子どもの割合が高いが、小6生になると、どの項目についても、会話する割合が1割程度減少する。中1生になると「勉強や成績のことについて」会話する子どもは1割増加する。中2生では再びほとんどの項目で親との会話が減少するが、「将来や進路のことについて」会話する子どもはやや増加し、中3生ではそれがさら

に増加する。中3生から、高1生、高2生と学年が上がるにしたがい、再度親と会話する割合が増加していくのがわかる。

小6生は、親よりも友だち集団に接近し、そこでの会話が重要になり始める時期であり、中学生になると、勉強や成績のことが学校生活で重要な位置を占めるようになる。中2生は、思春期特性からも親との距離を置く時期であり会話が大幅に減る半面、高校受験など進路や将来について考える時期に差し加かってきている。中3生以降、親と会話する割合が再度増加するのは、おとなとしての会話が徐々に成立してくるからであろう。親との会話の内容や割合から子どもたちの発達の経緯がうかがえる。

■図2-1-4 親との会話（学年別）

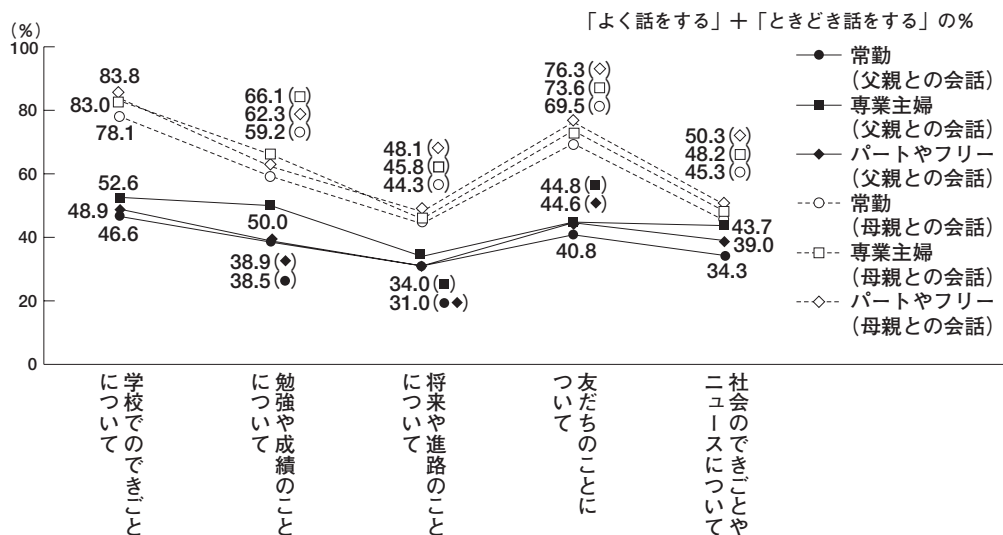


# ◆「専業主婦」の家庭は父親が教育熱心？

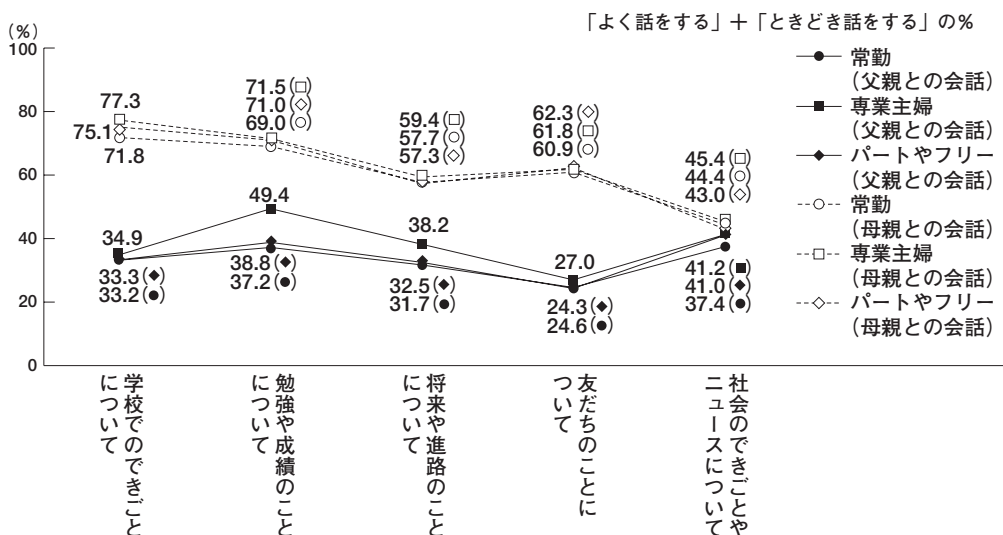
図2-1-5・6には、小・中学生について、母親の就労形態別にみた父親、母親との会話の割合が、項目ごとに示されている。まず母親との会話をみてみると、小学生では、母親が「常勤」の場合、会話の頻度はわずかに少ない傾向があるものの、中学生では、母親の就労形態によって、会話の頻度はほとんど違

わなないことがわかる。次に父親との会話をみると、小・中学生ともに母親が「専業主婦」の家庭の場合、父親との「勉強や成績のことについて」の会話の割合が高い特徴がみとれる。その一方で「学校のできごとについて」や「友だちのことについて」の会話にはほとんど差がない。母親が「専業主婦」の家庭は、父親が教育熱心のようなのである。

■図2-1-5 親との会話（小学生、母親の就労形態別）



■図2-1-6 親との会話（中学生、母親の就労形態別）

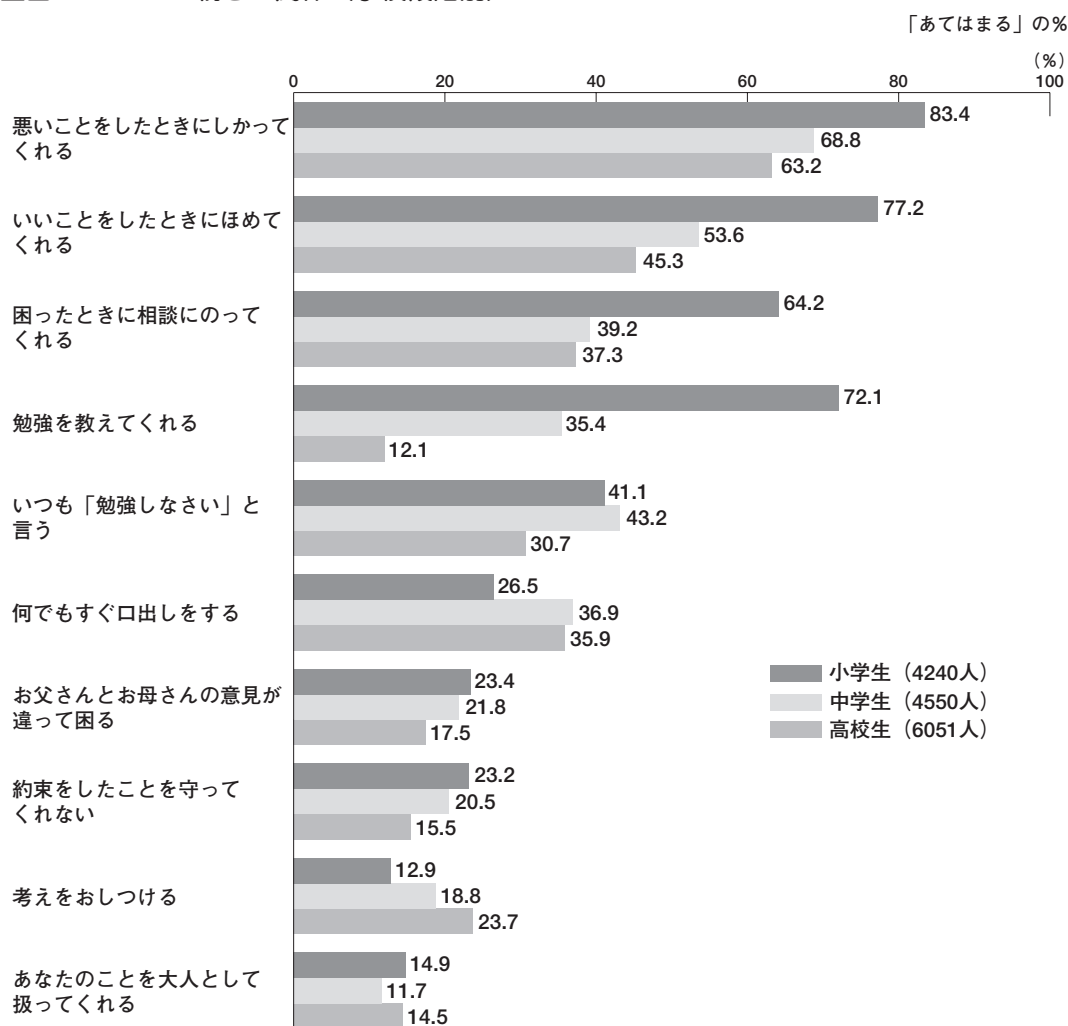


## ◆中・高生は、親のかかわりが煙たい

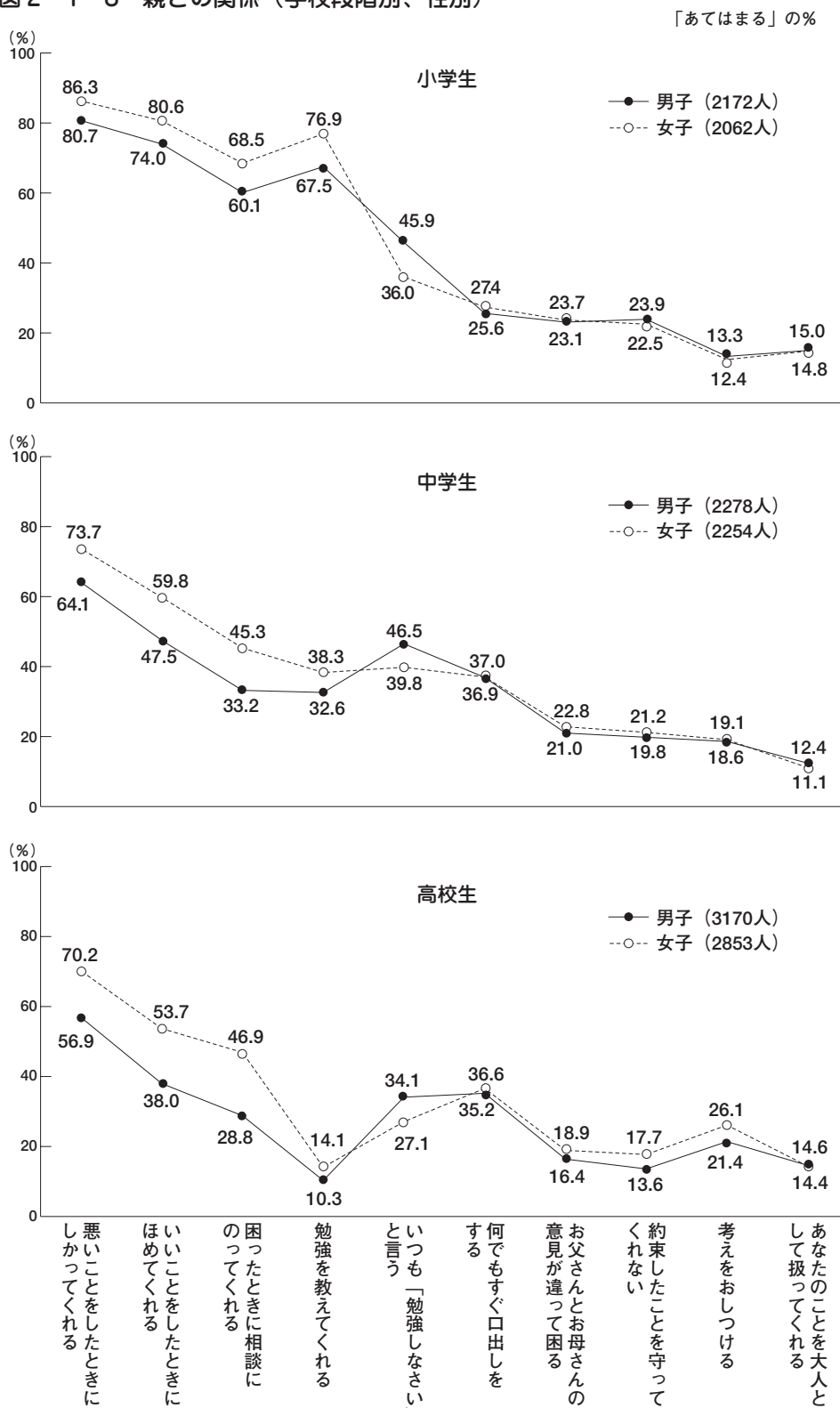
次に、親の子どもへのかかわりについてみてみよう。図2-1-7には、親との関係を表した10項目に関して、「あてはまる」と答えた割合（複数回答）について、学校段階別に示されている。小・中・高校生のいずれも、「悪いことをしたときにしかってくれる」と答えた割合が最も高く、次に「いいことをしたときにほめてくれる」が続く。しかし、それに続いて多い回答は、学校段階によって異なる。小学生は「勉強を教えてくれる」「困

ったときに相談にのってくれる」の順であるが、中学生は「いつも『勉強しなさい』と言う」「困ったときに相談にのってくれる」の順であり、高校生は「困ったときに相談にのってくれる」「何でもすぐ口出しをする」の順である。とくに「何でもすぐ口出しをする」への回答は、小学生では全体の約4分の1であるが、中・高生では3分の1に増える。中・高生になると、親からのかかわりをサポートイブに感じるよりも、干渉としてとらえやすくなるようである。

■図2-1-7 親との関係（学校段階別）



■図2-1-8 親との関係（学校段階別、性別）





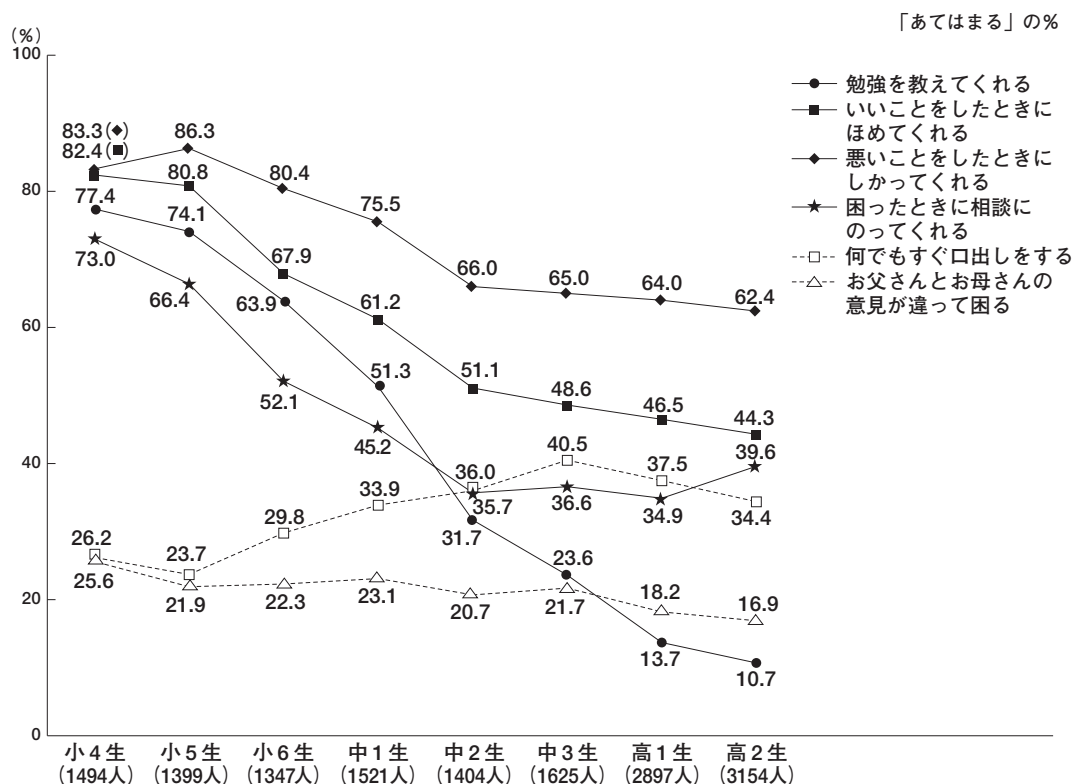
## ◆子どもをおとな扱いする親は、 わずか1割

図2-1-8には、親との関係について、学校段階別、性別に示されている。親が「悪いことをしたときにしかってくれる」「いいことをしたときにほめてくれる」「困ったときに相談にのってくれる」「勉強を教えてください」と答えた割合は、小・中・高校生を通して、男子よりも女子のほうが多い。反対に、親が「いつも『勉強しなさい』と言う」と答えた割合は女子よりも男子のほうが多い。親が「考えをおしつける」と答えた割合は、小・中学生ではあまり男女差がないが、高校生では女子のほうに多い傾向がある。親が「あなたのことを大人として扱ってくれる」と答えた割合は、小・中・高校生を通して1割あまりであり、ほとんど性差がない。学校

段階が上がっても、おとな扱いされる割合は常に1割程度にとどまり、親は中・高校生であってもまだおとなとして扱おうとはしていないことがうかがえる。

図2-1-9には、親との関係について、学年別に示されている。学年が上がるにつれて、「勉強を教えてください」は顕著に減少し、次いで「いいことをしたときにほめてくれる」「悪いことをしたときにしかってくれる」も大きく減少する。「困ったときに相談にのってくれる」は、中2生の段階まで大きく減少し、その後ほぼ横ばいとなる。「何でもすぐ口出しをする」は、小6生から増加しはじめ中3生がそのピークになり、高校生では減少傾向になる。親を煙たく感じ始めるのは小6生ごろからで、中2生から中3生がピークであることがうかがえる。

■図2-1-9 親との関係（学年別）



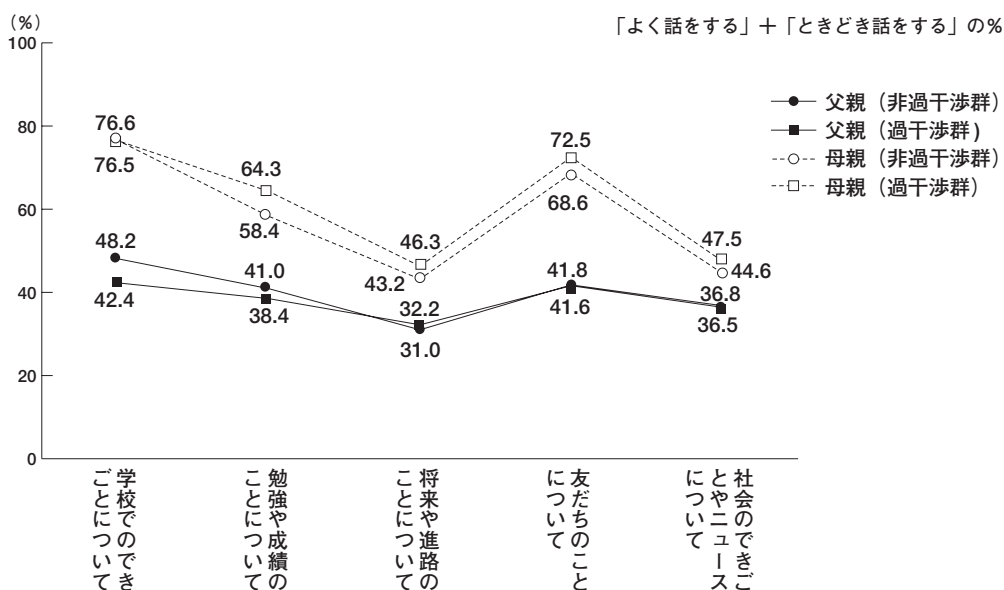
注) 複数回答

### ◆過干渉な親には友だちのことを話さない

このような親との関係が、先にみた親との会話にどのような影響をおよぼしているだろうか。図2-1-10～12には、親のタイプ（「非過干渉」群と「過干渉」群）によって、どれくらい親と会話しているか（「よく話をする」＋「ときどき話をする」割合）について、学校段階別、父親母親別に示されている。「学校のできごとについて」や「友だちのことについて」の母親との会話の割合をみると、

小学生（図2-1-10）では「過干渉」群と「非過干渉」群にはほとんど差はみられない。しかし、中学生（図2-1-11）では、「過干渉」群のほうが「非過干渉」群よりも会話している割合は5ポイント程度少なくなり、高校生（図2-1-12）に至ってはその傾向がより顕著となっている。友だち関係を中心としたプライベートな世界を秘密にしたがるというのは思春期の特徴であり、そこに過度にかかわってこようとする過干渉な親に対しては防衛的になるのであろう。

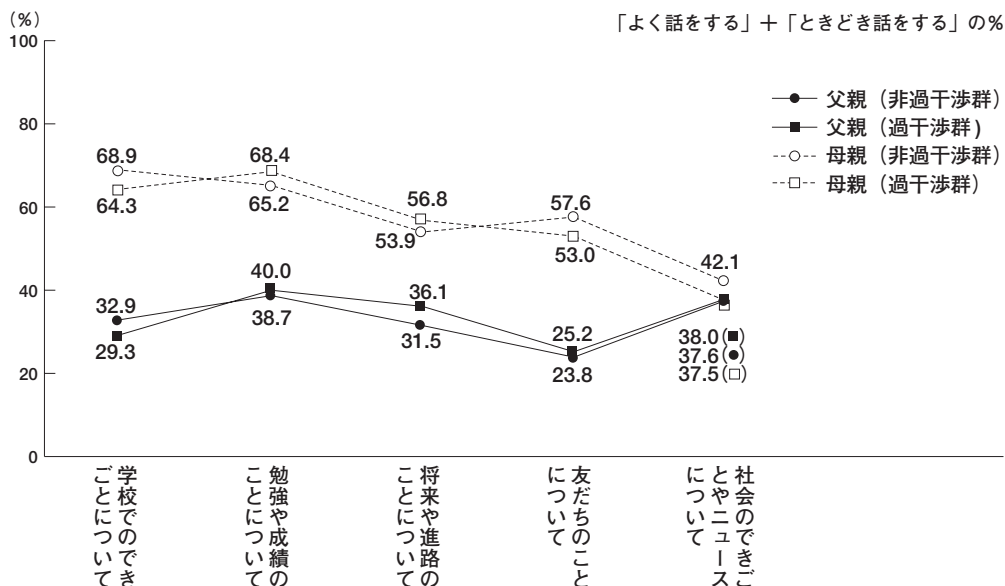
■図2-1-10 親との会話（小学生、親のタイプ別〔非過干渉群と過干渉群〕）



注1）サンプル数は、非過干渉群 3985 人、過干渉群 255 人

注2）「過干渉」群…「いつも『勉強しなさい』と言う」「何でもすぐ口出しをする」「考えをおしつける」の3つすべてに「あてはまる」と回答  
「非過干渉」群…「それ以外の場合」

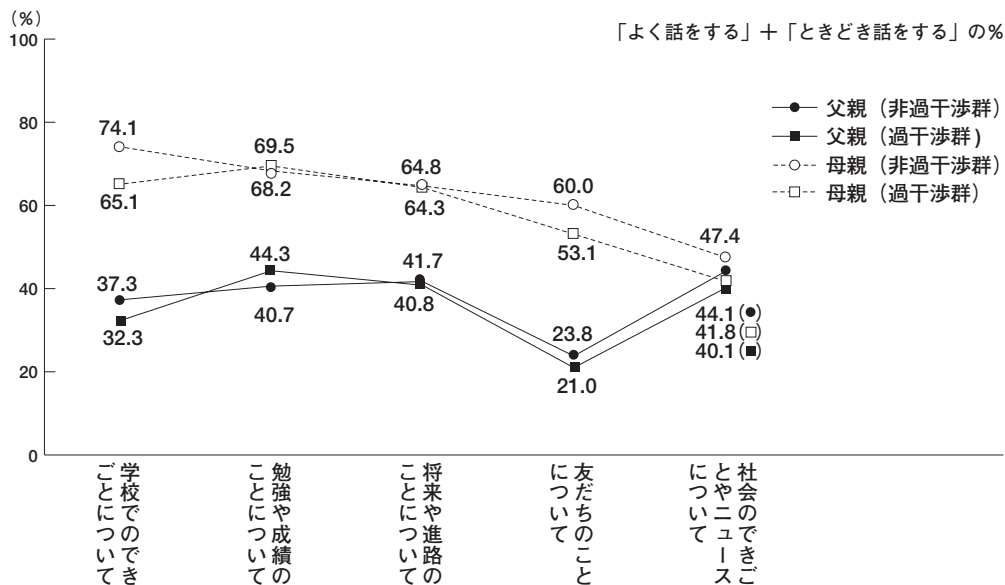
■図2-1-11 親との会話（中学生、親のタイプ別〔非過干渉群と過干渉群〕）



注1）サンプル数は、非過干渉群 4110 人、過干渉群 440 人

注2）「過干渉」群…「いつも『勉強しなさい』と言う」「何でもすぐ口出しをする」「考えをおしつける」の3つすべてに「あてはまる」と回答  
「非過干渉」群…「それ以外の場合」

■図2-1-12 親との会話（高校生、親のタイプ別〔非過干渉群と過干渉群〕）



注1）サンプル数は、非過干渉群 5460 人、過干渉群 591 人

注2）「過干渉」群…「いつも『勉強しなさい』と言う」「何でもすぐ口出しをする」「考えをおしつける」の3つすべてに「あてはまる」と回答  
「非過干渉」群…「それ以外の場合」

## 2. 友だち関係・異性関係

15%程度の子どもの悩みごとを相談できる友だちがいない。小学校高学年は友だちと同質でいようと緊張し、中学生ではギャング的な友だち関係を形成し、高校生は異質性を認め自立的な方向に向かい始める。異性交友については、女子のほうが男子よりやや早熟な傾向がうかがえる。

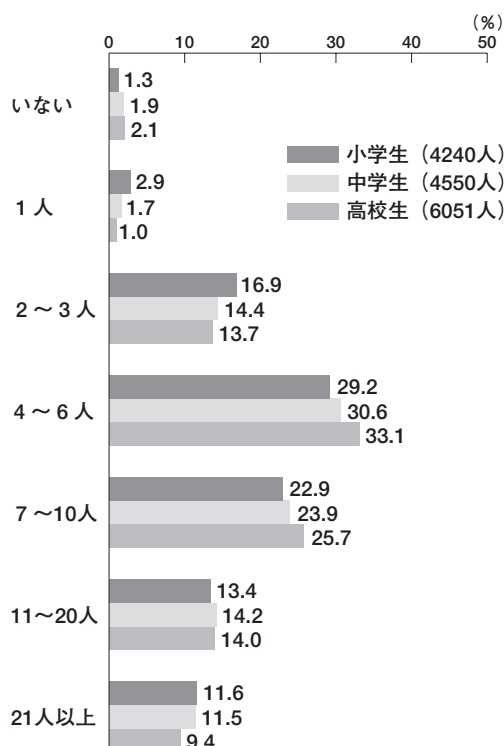
### ◆ 15%程度の子どもの悩みごとを相談できる友だちがいない

子どもたちはふだん、どのような友だち関係のなかで生活しているのでしょうか。

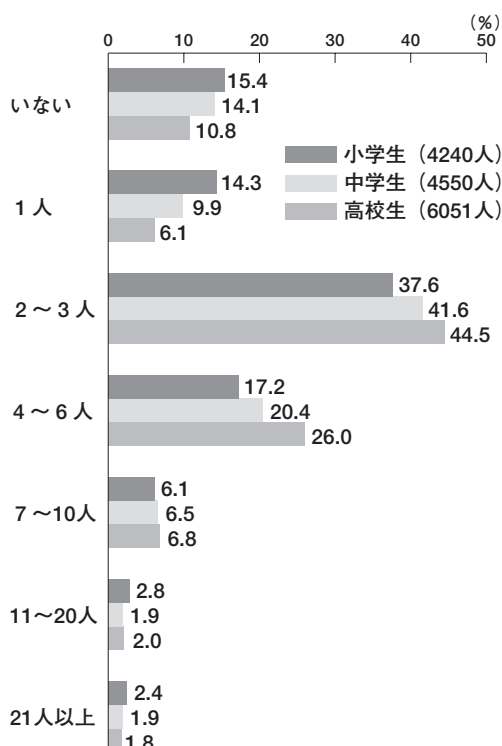
図2-1-13には、「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」の数について、図2-1-14には「悩みごとを相談できる友

だち」の数について、学校段階別にその割合が示されている。「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」の数は、小・中・高校生ともに、第1位は「4～6人」で3割が回答しており、第2位は「7～10人」で2割以上が回答している。「いない」＋「1人」と答えた者は3～4%である。一方、「悩み

■図2-1-13 よく話をしたり遊んだりする友だちの数  
(学校段階別)



■図2-1-14 悩みごとを相談できる友だちの数  
(学校段階別)



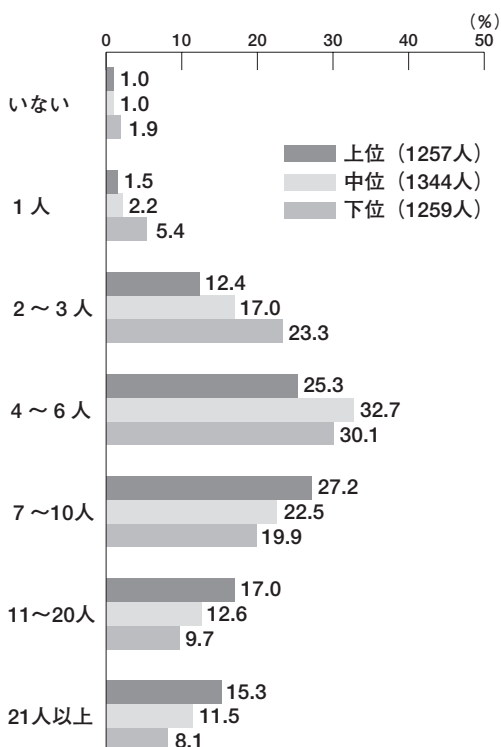
ごとを相談できる友だち」の数は、小・中・高校生ともに、第1位が「2～3人」で4割前後の者が回答しており、第2位は「4～6人」で2割前後の回答、第3位は「いない」で1割強の回答である。

「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」の数は学校段階での差があまりないが、「悩みごとを相談できる友だち」の数は学校段階とともに増える傾向がある。「悩みごとを相談できる友だち」が「いない」と答えた者は、小学生で15.4%、中学生で14.1%、高校生で10.8%である。話したり遊んだりする友だちはいても、悩みごとを相談できる友だちがいない者が、小・中学生では15%程度いることがわかる。

### ◆成績上位層は、友だちの数が多い

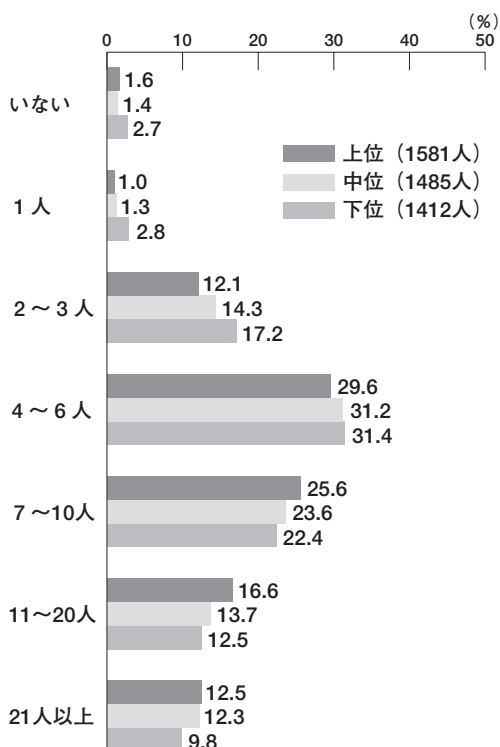
友だちの数は、子どもたちの成績と何か関係があるだろうか。図2-1-15・16には、小・中学生の「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」の数が成績別に示されている。小・中学生ともに、成績下位層は、上位・中位層に比べて「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」の数が、「いない」「1人」「2～3人」と答えた者が多く、反対に「7～10人」「11～20人」と答えた者は成績上位層に多い。この傾向はとくに小学生に強いことがうかがえる。友だちを作らずに、勉強だけをしていて成績がよいという構図は、小・中学生ともに、見いだされなかった。

■図2-1-15 よく話をしたり遊んだりする友だちの数  
(小学生、成績別)



注) 成績 (小学生) は、国語・算数・理科・社会の自己評価の合計点によって3区分した

■図2-1-16 よく話をしたり遊んだりする友だちの数  
(中学生、成績別)



注) 成績 (中学生) は、国語・数学・理科・社会・英語の自己評価の合計点によって3区分した

## ◆小学校高学年の女子は友だち関係に葛藤、緊張

図2-1-17には、友だちとの関係を表す項目に関して、「とてもそう」＋「まあそう」の割合を性別、学校段階別に示している。小・中・高校生ともに、7～9割が「友だちといつも一緒にいたい」と答え、7割が「違う意見をもった人とも仲良くできる」と答えている。「友だちといつも一緒にいたい」と答えた者が最も多かったのは小学生女子で、「仲間はずれにされないように話をあわせる」および「友だちと話が合わないと感じる」も小学生男子や中・高生の男女と比べて最も多い。「友だちが悪いことをしたときに注意する」も、小学生女子が多い。小学生女子は、友だちへの関心が高く親密さを求める反面で、友だち関係への緊張感も高いことがうかがわれる。

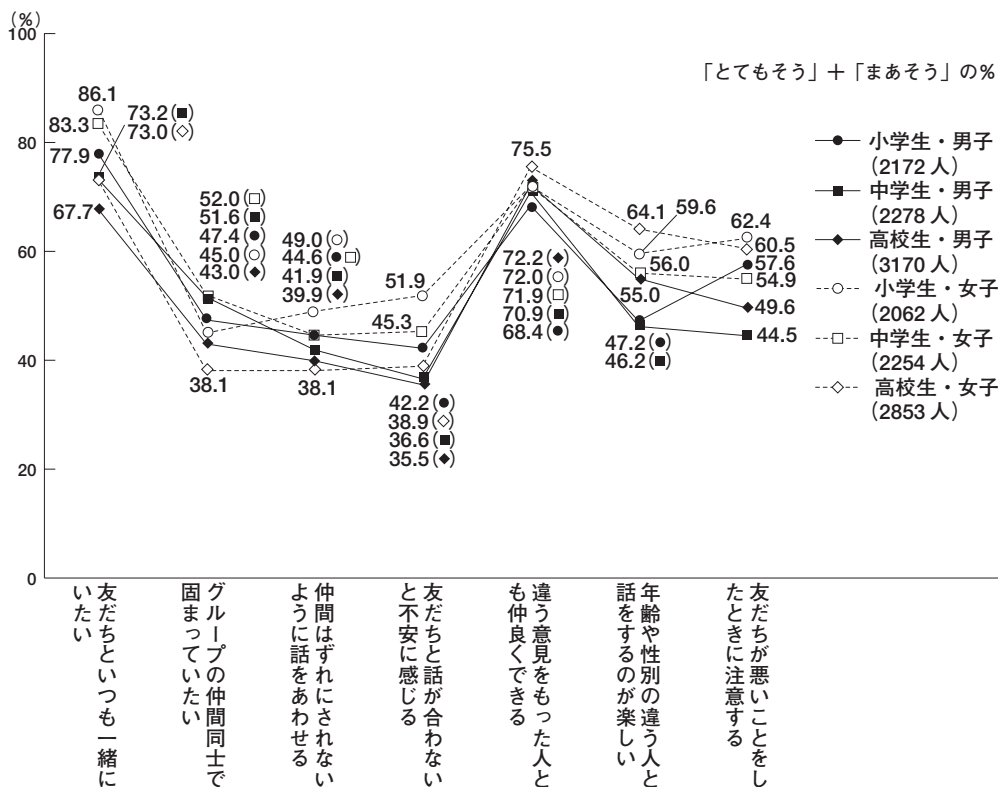
また、「年齢や性別の違う人と話をするの

が楽しい」と答えた者は、学校段階によらず男子より女子のほうが多く、高校生女子が最も多い。また、「グループの仲間同士で固まっていたい」および「仲間はずれにされないように話をあわせる」への回答は、高校生女子が最も少ない。女子は高校生になると、異質な人との交友を好み、友だちと同質でいようとする葛藤から解放されていくことがうかがえる。

## ◆男子の友だち関係、女子より平和？単純？

一方、中・高生男子は、「友だちと話が合わないと感じる」への回答が少なく、「年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい」および「友だちが悪いことをしたときに注意する」への回答も少ないことから、同世代同性の友だちと同調し、あまり不安を感じずに友だちとつきあう様子がうかがえる。友だち

■図2-1-17 友だちとの関係（学校段階別、性別）



関係の発達には明らかに性差がある。

# ◆中2生は、「赤信号、皆で渡れば怖くない!？」

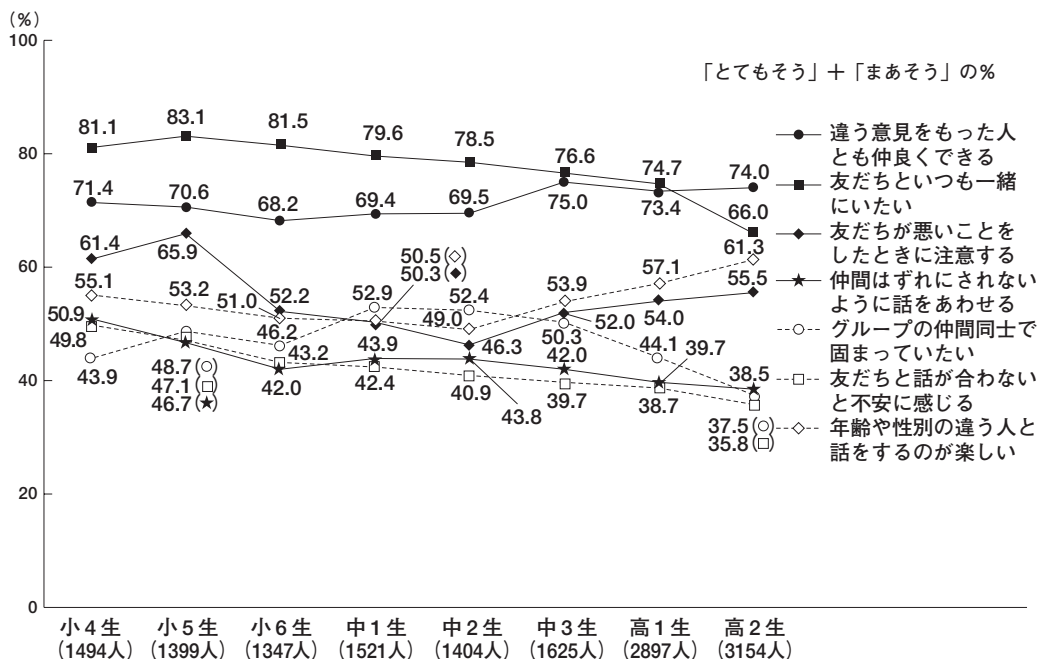
図2-1-18には、友だち関係を表す項目について「とてもそう」＋「まあそう」と回答した割合が、学年別に示されている。まず友だちとの親密な関係を表す2項目のうち、「友だちといつも一緒にいたい」は学年の上昇とともにゆるやかに減少し、高2生になるとより減少する。もう一方の「グループの仲間同士で固まっていたい」は、小5生で上昇し、さらに中1生でピークとなるが、徐々に減少し高校生になると顕著に減少する。

次に、友だち関係への緊張感を表す2項目の「仲間はずれにされないように話をあわせる」および「友だちと話が合わないと感じる」は、小4生が最も多く、学年の上昇とともにゆるやかに減少していく。

また、異質性を認めることを表す2項目のうち、「違う意見をもった人とも仲良くできる」は、中3生以上になると増加し、「年齢や性別の違う人と話をするのが楽しい」は、中2生までゆるやかに減少し、その後増加する。

最後に規範意識を表す「友だちが悪いことをしたときに注意する」は、小5生が最も多く、中2生で最も少なくなり、その後学年が上がるとともにまた増加する。同世代の仲間と強固にまとまり、悪いことも注意し合わないギャング的友だち関係は、中1生～中2生がピークであり、高校生になるとゆるむことがうかがえる。友だちと同質であることにエネルギーを使う小学校高学年、ギャング的友だち関係に身を投じる中学生、自立的な方向に向かう高校生という、友だち関係の発達の構図が浮かぶ。

■図2-1-18 友だちとの関係（学年別）





## ◆過干渉な親が、子どもの友だち関係に及ぼす影響

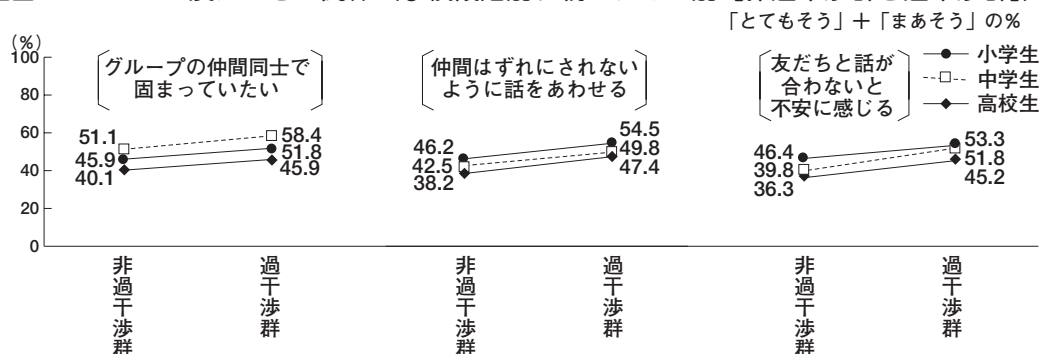
次に、親子関係と友だち関係の関連性をみてみよう。図2-1-19には、友だち関係の3項目に関する回答（「とてもそう」＋「まあそう」）の割合について、過干渉に関する親のタイプ別（「非過干渉」群と「過干渉」群）、学校段階別に示されている。どの学校段階でも「過干渉」群のほうが、「非過干渉」群に比べて、「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話をあわせる」「友だちと話が合わないと感じると不安に感じる」と回答した者が多く、緊密な友だち関係を望み、仲間からはずれないようにエネ

ギーを使っていることがうかがえる。

「非過干渉」群と「過干渉」群の差を学校段階別に比べてみると、「グループの仲間同士で固まっていたい」は、学校段階による違いはみられない。しかし、「仲間はずれにされないように話をあわせる」は高校生でその差が大きい傾向にある。「友だちと話が合わないと感じると不安に感じる」は中学生で差が大きい。

図2-1-20には、図2-1-19でみた友だち関係の3項目について、一致に関する親のタイプ別（「一致」群と「不一致」群）、学校段階別に回答の割合が示されている。「一致」群と「不一致」群の差を学校段階別にみると、図2-1-19と傾向が類似しているのがわか

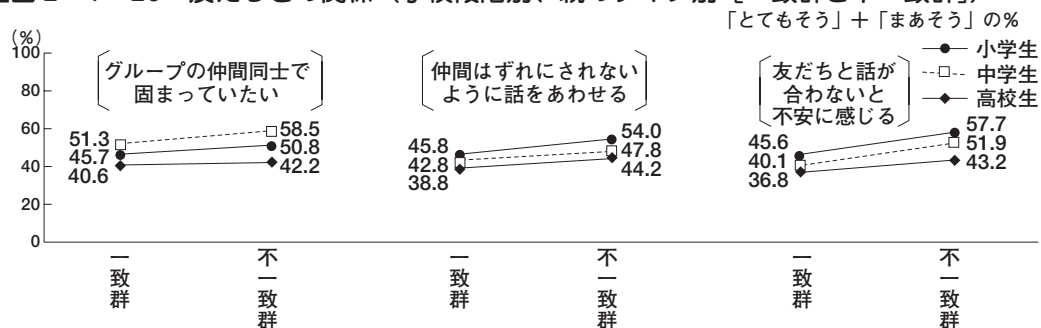
■図2-1-19 友だちとの関係（学校段階別、親のタイプ別〔非過干渉群と過干渉群〕）



注1) サンプル数は、小学生（非過干渉群 3985 人、過干渉群 255 人）、中学生（非過干渉群 4110 人、過干渉群 440 人）、高校生（非過干渉群 5460 人、過干渉群 591 人）

注2) 「過干渉」群…「いつも『勉強しなさい』と言う」「何でもすぐ口出しをする」「考えをおしつける」の3つすべてに「あてはまる」と回答  
「非過干渉」群…「それ以外の場合」

■図2-1-20 友だちとの関係（学校段階別、親のタイプ別〔一致群と不一致群〕）



注1) サンプル数は、小学生（不一致群 433 人、一致群 3807 人）、中学生（不一致群 347 人、一致群 4203 人）、高校生（不一致群 294 人、一致群 5757 人）

注2) 「不一致」群…「約束したことを守ってくれない」「お父さんとお母さんの意見が違って困る」の2つすべてに「あてはまる」と回答  
「一致」群…「それ以外の場合」



る。とくに「友だちと話が合わない」と不安に感じる」は、「不一致」群のほうが、「一致」群に比べて回答の割合が高く、小・中学生にその傾向が強い。親が過干渉であっても不一致であっても、いずれにせよそのようなかわりの特徴が、子どもの友だち関係の不安やプレッシャーなどに関連があることがうかがわれる。

## ◆異性との交友は女子のほうが

### 1 歳程度早熟

図2-1-21には、「今、つきあっている異性」の有無について、性別、中・高生別に回答の割合が示されている。今、つきあってい

る異性が「いる」割合は、高校生女子が最も多く19.9%であるのに対し、高校生男子は14.2%である。中学生も女子が10.4%、男子が8.6%と、女子のほうに回答が多い。

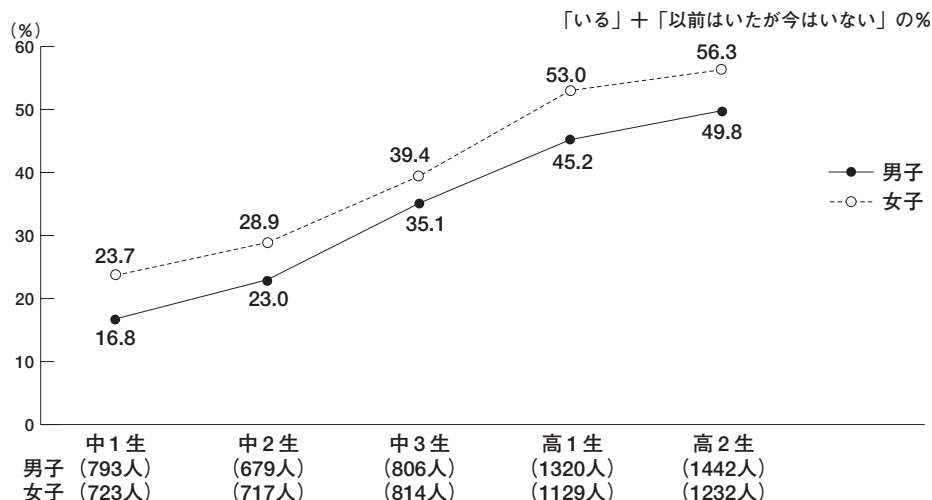
図2-1-22には、「異性とのつきあい経験」について、「いる」＋「以前はいたが今はいない」の回答の割合が、性別、中・高生の学年別で示されている。すべての学年において、女子のほうが男子よりも、「異性とのつきあい経験」のある割合が上回っており、女子のほうが男子よりも、ほぼ1学年早く、その割合に達する傾向がうかがえる。

■図2-1-21 つきあっている異性（中・高生、性別）

	以前はいたが 今はいない		いたことがない	無回答・不明 (%)
	いる			
中学生				
男子 (2278人)	8.6	16.5	64.1	10.8
女子 (2254人)	10.4	20.6	59.2	9.8
高校生				
男子 (2762人)	14.2	33.4	46.8	5.6
女子 (2361人)	19.9	34.9	39.6	5.7

注) 中・高生のみ。この項目の高校について、「無回答・不明」の多い学校は、学校ごと対象から外した

■図2-1-22 異性とのつきあい経験（中・高生、学年別、性別）



注) 中・高生のみ。この項目の高校について、「無回答・不明」の多い学校は、学校ごと対象から外した